

洪水経過時間の異なるものを取扱っているので、急流河川多く資料も少ない日本河川ではそのまま適用し難い。

この他 McCarthy 氏は

$$\text{Storage} = k [xI_t + (1-x)D_t]$$

なる式を提案した。

又、最近 Langbein, Barrow 等は McCarthy の式を變形して良結果を得ているが、いまだ實際に適用するに充分であると思われない。

著者が行つた實驗は河幅約 12 m 有効長さ約 2200 m 平均低水深 50~60 cm なる整正矩形實驗河川で最大 20 m³/sec 水位にして最高 130 cm 洪水経過時間 70 分位の人工洪水を起し水位流量の觀測を行つたものである。

これより時間水位、時間流量、同時水位、水面勾配の變化、河道貯溜の變化、Peak の遞減等を調べこれにより従來の研究結果についての妥當性を考察し且つ洪水の諸性質を明らかにせんとするものであつて、その中間報告をするものである。

14. 河川の洪水流量について (20分)

正員 鶴見 一之

さきに土木學會誌第34卷第3號に上記の題目で拙論を掲げておいたが、その後更に諸種の data を手にすることができ、そのつど比較検討するの機會を得たから、前論を更に擴大して得た式を皆様の前に提出し、御批判を仰ぎ、一層 refine された日本での洪水流量公式ができあがるように望むものである。

圖表數葉が本論の説明に必要であるが便概にはこれを省略する。